



## 北小開校144周年記念全校朝会を開催

今、10月生まれの人達に、「お誕生日おめでとうございます」を言いましたが、明日の10月7日は、皆さんの母校であるこの北小学校のお誕生日＝開校記念日ということになります。北小学校は、明日で144歳になります。

さて、私はこれまで、全校朝会の中で＜北小の宝物＞について話をしてきました。今ここに『北小140年のあゆみ』の中でも紹介されていますが、北小には宝物が4つあります。

1つ目は、明治11年に、桐生学校の新しい校舎ができた時に、当時の群馬県令（現在の群馬県知事にあたる）揖取素彦さんが贈ってくれた『桐生学校の篇額（校名額）』と『祝歌（お祝いの短歌）』で、「北小っ子通り」のケースの中に飾ってあります。

2つ目は、『青い目の人形：ウオヘロちゃんとアンジェラちゃん』で、これも「北小っ子通り」のケースの中に飾ってあります。

3つ目は、『ラグーサ・玉さんの油絵』で、『菊（の花）』と『柿（の実）』の静物画2枚が、校長室に飾ってあります。

そして、4つ目の宝物が、今ここに持ってきた掛け軸で、＜菅原道真公の肖像画＞です。明治6年10月7日の桐生学校開校の日に、桐生学校の仕事に関わっていた7人の人達から贈られました。

実は、この掛け軸の肖像画は、桐生市教育委員会が保管しているということになっていたのですが、文化財保護課というところに連絡して調べてもらいましたが、そういった事実はないことが分かりました。

そして、改めて北小の中の色々な場所をくまなく探してみたところ、今年の9月15日に、北小の郷土資料館：学校資料室の戸棚の中から発見されました。

＜菅原道真公の肖像画＞は、『北小140年のあゆみ』では、『菅神御影（かんしん ぎょえい）』とか『菅神尊像（かんしん そんぞう）』という名前で紹介されていますが、今回発見された時には、掛け軸が入っていた木箱に「天満大自在天神尊影（てんまん だいじざい てんじん そんえい）」と書かれていました。

「菅神御影」とか「菅神尊像」という名前で木箱に書かれていなかったもので、これまで見落としていたのかもしれない。

「御影（ぎょえい）」、「尊像（そんぞう）」、「尊影（そんえい）」というのは、神様や仏様、身分の高い立派な人の姿を写した像（彫刻）や肖像画（絵）のことを指しています。

さらに調べてみたところ、「天満大自在天神（てんまん だいじざい てんじん）」というのは、菅原道真公の怨霊（おんりょう）を神様にして祀り上げた時の名前だということが分かりました。

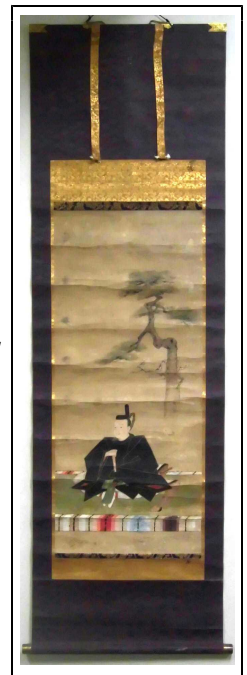
「怨霊」というのは、人々に崇りをもたらすような悪い靈魂（れいこん）のことで、この世に恨みをもって亡くなった人、思いがけない災難に巻き込まれて、運悪く亡くなってしまった人の靈魂が「怨霊」になると言われています。

さて、皆さんの中には知っている人もいますが、菅原道真という人は、日本の平安時代の政治家・学者で、太政大臣という最高の位にまで上り詰めた貴族です。

しかし、無実の罪で低い位に落とされて、京都から北九州の太宰府という職場に転勤させられてしまい、再び京都に戻って仕事がしたいという願いが叶うことなく、自分が受けたひどい仕打ちに恨みをもったまま太宰府で亡くなってしまいます。

すると、その後、日本の国にたくさんの自然災害や疫病が発生するようになり、「菅原道真の怨霊が朝廷や日本の国に崇りをなしている」という噂が広まるようになり、人々は菅原道真の怨霊を鎮める（恨みに思っている気持ちを和らげる）ために、「天満大自在天神（てんまん だいじざい てんじん）」という神様にしてお祀りするようになったということです。

菅原道真は神様になることによって「菅原道真公」と呼ばれるようになり、神様として



の名前も時代が経つにつれて、「天満大自在天神（てんまん だいじざい てんじん）」のから「天満天神」になり、今では親しみを込めて「天神様」と呼んでいる人がたくさんいます。

去年の11月の全校集会で「桐生新町」の話をしました、「桐生新町」は、「北側を天満宮の天神様が守り、南側を浄運寺の仏様が守る町にする」という計画で、町造りが行われた歴史をもっています。

そして、北小地区にある「天満宮」に祀ってあるのも、もちろん「天神様」である菅原道真公で、今では「学問の神様」としてたいへん有名です。

高校入試や大学入試の時には、「どうか合格できますように。天神様よろしく願いいたします」と、合格祈願のために「天満宮」を訪れる受験生がたくさんいます。

ところで、先ほど、この＜菅原道真公の肖像画＞は、明治6年10月7日の桐生学校開校の日に、桐生学校の仕事に関わっていた7人の人達から贈られたと言いましたが、この掛け軸の裏側には、この肖像画を桐生学校に贈ることになった理由が、『菅公尊奉校之記(かんこうそん ほうこうのき)』として書かれています。

皆さんに分かりやすい言葉に直して、紹介したいと思います。

### 『菅原道真公の肖像画を桐生学校に贈ることになったわけ』

この菅原道真公の肖像画は、その昔、法眼（ほうげん）という高い称号を授けられた狩野元信（かのう もとのぶ）という絵描きさんが描いたものとして、ある家に伝わっていたたいへん貴重な物です。

お願いすれば、天神様のお力がすぐに現れてくる肖像画として、私達が住んでいる梅田の里に長い間お祀りしてきました。

ところで、明治維新の時には、色々なことが改められて良くなりましたが、その中でも、学校を新しく造るということは、何よりも素晴らしいことではなかったかと思っています。

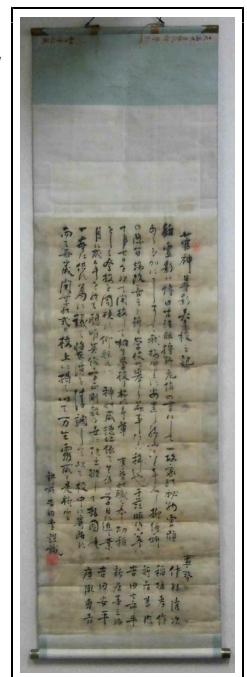
桐生学校は、明治6年10月7日に開校しましたが、私たち7名はこの桐生学校の事務の先生に任命されて、毎日登校してくる子どもたちの面倒をみています。

この肖像画を寄付することになった私たちが、天神様をお願いしたいのは、天神様のお力によって、桐生学校の子どもたちに勉強したことがしっかりと身に付くようお導きいただきたいということです。

また、桐生学校の子どもたちが、賢く優れた人、正しい行いができる意志の強い人に成長して、少しでも社会の役にたてる大人になれるようお導きいただきたいということです。

そうなることを期待して、私たち7名は相談のうえ、天神様の肖像画を新しい掛け軸にして、桐生学校に寄付することにしました。

したがって、毎年行われる開校記念日の式の中で、この肖像画を掲げることによって、天神様のお力が、いつまでもいつまでも桐生学校の子どもたちに及んでいくことを祈っています。



事務 佐波 清次 吉田 七郎平 稲垣 孝作 広瀬 勇吉  
新居 甚内 新居 喜三次 吉田 安平

謹識（つつしんでしるします）

今から144年前に、桐生学校に勤めていた7人の先生方が、「勉強をしっかりと身と付けて欲しい」、「正しい行動がとれる意志の強い人に成長して欲しい」、「社会の役に立てる立派な大人になって欲しい」という願いを込めて、学問の神様である菅原道真公の肖像画を寄付してくれました。

しかし、そのような願いは、144年前の桐生学校の先生方だけがもっていたわけではありません。

山田第一尋常小学校時代の先生方も、桐生市北尋常小学校時代の先生方も、みんな同じ願いをもっていたといえます。

そして、もちろん、今の北小学校の先生方も、まったく同じ願いをもっています。

最後になりますが、実は北小には、もう一つ宝物があります。

5つ目の宝物ということになりますが、『北小140年のあゆみ』では紹介されていません。でも、先生方も、皆さんの家族も、地域の人たちも、みんな同じように“宝物”だと思っているものです。

いったい何でしょうか？ お話を終わります。

**【狩野元信（かのう もとのぶ）】**

室町時代末期の画家で、1476年（文明2年）に生まれ、1559年（永禄2年）に没した。

足利将軍家の御用絵師で、漢画を主軸とした水墨画が得意で、将軍足利義晴は、元信の絵を賞して法眼に叙し、そのため後世、古法眼元信と呼ばれた。

作風は、山水・花鳥・人物の多方面にわたり、いずれも神品といわれ、桃山風様式の先駆をなすものである。